



みろく

— MIROKU —

Kambara
Family

No. 11

2018年7月25日発行

社風と家風を考える

常石グループには、どのような社風（理念・思考・行動信条など）があるのでしょうか。またオーナー家として、神原家にはどのような家風があるのでしょうか。第3世代の4人にお話を聞き、第4世代の方々にはアンケートで回答いただきました。

第3世代

Third Generation

地域とともに生きること忘れずに

変化することが進化です

どんな企業でもいえることですが、そこに所属している、あるいは所属していた人間（当事者）に「企業風土を語れ」というには無理があるような気がします。当事者は必死なのです。社風はあまだ、雰囲気はどうの、なんて考えている暇はないのです。

ことにグループの中心である造船は国際的な景気動向に敏感であり、そのうねりに翻弄されることが宿命ともいえる業種です。造船景気の良い時は、活発な営業活動とそれに呼応する製造現場の活気があります。逆に景気が冷え込めば、わずかな需要の争奪戦が繰り広げられ、受注につながれば製造現場は燃え、それがなければ現場は雌伏して次の受注のために技術の蓄積に力を注ぎます。

つまり、状況や環境によって組織の雰囲気（社風）は大きく変化しなければならぬのです。変化もなく十年一日のような雰囲気の会社や組織は進化していいのではないかと、というのが私の考えです。

質素につつましく生きなさい

次に「家風」ということですが、これも当事者にとっては皆目見当のつかないものです。「義理がからんでいたとしても保証人にはなるな」というのは初代から受け継がれた教えですが、何も私たちだけではなく世間一般の方々の戒めとして常識です。

ただ一つ、初代の言葉として心に銘じているのは「小さな利益でもコツコツと拾い集めれば、やがて大きな利益につながる」という言葉です。おじいさん（勝太郎）は、道端に落ちていた十円玉を例えて話したのですが、創業時の苦労を思い出しながらの言葉だったのでしょう。

その時、私はまだ子どもであつたため、単純に「小さなものでも集めれば大きなものになるのだ」という意味だと思っていました。やがてこの言葉はあらゆるコスト競争につながる大切な言葉だと気づきました。

家風というのはあまりにこまごましいのですが、今挙げた「小さな利益でも」という言葉は、私たちの暮らしに取り入れるべきものではないでしょうか。

地域を尊重し、OBに敬意を

質素に、つましやかに生きなさい。その代わり、社会や地域に役立つことや組織の成長につながることに限っては、大胆にアクションを起こしましょう。それがどういふものであるかは、これからの時代を生きる一人ひとりの宿題として、心に留めていてください。

これは「社風」とは次元の違うものですが、「地域とともに生きる」という考えがグループ全体のコンセプトになっていると思っています。グローバルな事業展開を推進しているとはいえ、グループの原点は福山市沼隈町常石にあります。

多くの社員はこの場所に仕事の間を持ち、この場所を住まいとして、子を育て、生活しています。もちろん私たちのグループとは関係なく、古くからここに住んでいる方々も多くいらっしゃると思います。

そんな地域で企業グループとして成長してきたことを忘れてはなりません。私たちは地域とともに育ってきたのです。ですから、地域の文化、教育、環境に何らかの形で関わる義務があるのです。

神原眞人



務があるのです。

同じように、グループのOBやそのご家族に対する敬意も忘れてはなりません。今から30年近くも前に海外に製造拠点を構築するというアクションには、想像を絶するものがありました。慣れない海外の現場で苦労した人、国内でそれをフォローしカバーした人、関係するグループ全社が一丸となつて苦労したのです。それ以外にも、現在のグループの礎となつた多くのOBの努力も忘れてはなりません。



フィリピンにTHIを設立（1994年）

第3世代

Third Generation

礼節を重んじる神勝寺の精神

社風について 思うこと

今から50年前のことですが、神原汽船、常石造船の社風は「二つの大きな家族」というものでした。家長は私の父である神原秀夫社長です。家長の決断は、すべからず「善」であり、全社一丸となってこれを実行、実現すべき事柄でした。ただし、秀夫社長は他の人の意見を素によく聞き、理解することができ、皆が意見を出し合い、また反対意見であっても堂々と展開することができた環境がありました。

時代の変化、事業内容の多様化など、背景は大きく様変わりしたとはいえ、今でもこうした環境（社風）はグループ各社に残っているのではないかと思います。

神勝寺の精神と ビジネスマン

もう一つ「社風」として残していきたいものに「神勝寺の精神」というものがあります。それは具体的には「常に礼節を重んじ、茶の心（おもてなし）を持ち、豊かな心、生活と文化を高める」という思いをすべ

ての従業員が持っているグループであることです。もちろん、これは精神として持ち合わせることで、

ビジネスマンとしては、失敗を恐れず常にアグレッシブに行動することは、イロハのイとして持ち合わせていなければなりません。これには上下左右の密接なコミュニケーションが大切になります。そして、それが可能な環境をつくるよう努力すべきではないでしょうか。

要するに「社風」とは、自然発生的に生まれるものではなく、その環境づくりが大きな要素となり、その中から生まれ育っていくものであるということです。

大きなファミリィから 小さなファミリィへ

かつての常石造船、神原汽船は、従業員も含めた巨大なファミリィでした。しかし、時代の変化がファミリィの概念を変えてしまいました。「ファミリィ」とは「家庭」という極小単位概念となっていました。だからこそ、「族三代にわたって集うことができるのは、すばらしいことだ」と思います。そのよりどころとしての神勝寺は、とても大切なものなのです。

神原 治



秀夫はよくお茶を点てて人をもてなしていました



第3世代

Third Generation

質素と儉約の家風

人が集まる 家庭環境

「家庭のこと」というと、その昔、私のおじいさんである神原勝太郎の時代のことを思うのです。当時の神原家はとにかく人の集まる家で、海運や石炭関係などの仕事関連から、地域の有力者、個人的な相談事を持ち込む人など、夕刻にもなると多くの人がやって来しました。

時には大勢で、時には一対一で、笑顔で、深刻な顔で、おじいさんはそんな人たちと言葉を交わしていました。おばあさんはおばあさんで、来客に茶や茶菓子を出したり、時に

は食事を用意したり、忙しく立ち回っていました。

そんな家でしただけから、「家庭」というよりも「人の集まる場所が私の家」という思いの方が強かったような気がします。今の人々からすれば、家族も子どもも「気の休まる暇もない」と思うかもしれませんが、当時の神原の家はそれが当たり前のことだったのです。

活気に満ちた 家庭環境

次に叔父である神原秀夫の時代です。勝太郎はお酒を飲まない人で、甘い茶菓子で淹茶をすすりながら、じつ

くり地道な事業計画を話す人でした。

これに対して秀夫叔父は豪放磊落、自宅に取引先の人や従業員を引き連れて来ては、毎日のように宴会を開いていました。そこではスケールの大きな話が飛び交い、夢のような計画を立案しては、それを次々に実現してしまふような人でしたから、家の中も活気に満ちあふれていました。

また、昼間にカミナリを落として叱責した若い従業員を招いては酒を勧め、食事をさせて慰めることもたびたびでした。たぶん「なぜ叱ったのか」を説明して、次には良い結果を見せてほしいというようなことを言い聞かせ、励ましていたのだと思います。

事業は壮大に、 生活は質素に

祖父と叔父の時代のわが神原家の環境の話をしました。二人は正反対のようでしたが、ただ一つだけ共通した心情がありました。それは「質素と儉約」を重んじるということです。

二人とも船を造る、設備を充実させる、新しい事業に取り組むなど、ビジネスに関することには出費を惜しみませんでした。ただし、こと自分たち家族の生活に関しては、質素と儉約を旨とすることを信条として持ち続けました。そして、この家風は現在まで連綿と受け継がれているのだと信じています。

いつも大勢の人が集まる
神原家



神原 浩士



留まっていたら何も動かない

造船という家業

海運と造船。神原の家はそれを家業として常石の地で生業を立てて来ました。初代から数えて3世代目となる私は、ことに造船と深く関わって来ました。造船という事業は好不況の波をともに受けざるを得ない産業です。

個人の感想として社風のことを言わせてもらえば、宿命ともいうべき

好不況の波の中で、一貫して持ち続けて来たのは「とにかく頑張る」という精神風土だと思います。

木造船の造船会社が、初めて建造した鉄鋼船はわずか3百トン強でした。これを砂浜に敷かれたレールに乗せた台車を滑らせて進水させたのです。昭和33年のことです。それからわずか数年で、数千トンクラスの船を自前の建造ドックで完成させました。そんなことがなぜ可能だったのか、それは従業員の頑張りです。

従業員だけではなくありません。叔父も幹部クラスの従業員も、全員が頑張りに頑張ったのです。

この精神風土はその後受け継がれ、好不況に関係なく全員が頑張ることで、あらゆる状況乗り越えて今日に至っているのです。

とにかく動くこと

沼隈半島の先端に位置する常石は僻地でした。そこで海運業を営

み、やがて造船業を始めたのは私たち一族の長でした。もしも地理的なコンプレックスに甘んじていたとしたら、何も動かなかったはずですよ。

「留まっていたら何も動かない」初めは小さなアクションでも構いません。とにかく動くことです。家風を云々するつもりはまったくありませんが、一つの行動規範として、この言葉を忘れないでいてください。

初の鉄鋼船「美小丸」を建造していた1958年（昭和33年）頃の造船所のスケッチ



神原 誠之



第4世代 アンケート

Fourth Generation

第4世代に聞く

社風や家風について、
第4世代の方々にもアンケートしました。

Q 常石グループの「社風」とは？

A Answer
・地元地域を大切にするとともに発展する。

・従業員を大切に。地域とともに発展する。
・リスクがあっても大きなチャレンジをすることに肯定的。
・地元貢献に対して積極的。運動会や祭りなどにも何らかの形で関わっている。

・祖父（秀夫）も代表も私たち第4世代も、和気あいあいと従業員と飲食しているため、経営者と従業員の距離が近い。風通しの良い会社になりたいの思

いが根底にあり、この社風は大切に受け継ぎたい。次世代の子どもたちにも、飲みニケーションを通じて従業員とオーナー家との距離を意識してほしい。これは、モノを造る地方の会社としては大切なこと。オーナー家・経営者として、現場の従業員の名前と顔を一人でも多く覚えようとする努力をすべき。

今までは強烈なトップダウンという社風があったのも事実。しかし今後はそれだけではダメ。グループの規模も大きくなり、世代も価値観も変わってきたので、どのようにマネジメントしていくかが大きなテーマ。時代

に合った風土改革が必要。

Q 神原家に共通する「家風」とは？

A Answer
・第3世代は家父長制、第4世代は多様。

・従業員と頻りに飲食するよいうな社風のおかげで、「人が好き」なファミリーであり、それが家風なのだと思う。ファミリーが仲良くできるような種まきをするのが、私たちの世代の務め。ファミリー総会を開催する意味がそこにある。「仲良く」を家風として根づかせたい。家も近く、昔からみんな兄弟のように

育ってきた。祖父の存命中は、毎週末いとこが集まって夕飯を一緒に食べていた。それがファミリー総会として受け継がれているのだろう。

Q 常石という地域のイメージは？

A Answer
・造船の町。
・地元常石の方の協力のもと、事業が成り立っている。

・創業の地であり、今も住む町として大事にしたい。地域貢献もしたい。雇用を守り地域を守る。それが常石そのものだと思う。

第6回 神原家 ファミリー総会

3月31日(土)、無明院においてファミリー総会を開催しました。

集合、読経



Mumyojin



Hiroshima
Shinshoji
Mumyojin
BellaVista
SPA & MARINA ONOMICHI

スケジュール

The 6th
Kambara Family Meeting
Schedule
2018.03.31
Saturday

15:00	開会、読経
15:05	家長挨拶
15:10	サマースクール報告
15:30	写経、作務 (無明院清掃、お墓清掃)
17:30	夕食会(ベラビスタ)
20:30	終宴



サマースクール報告



Mumyojin



写経、作務



Mumyoin



夕食会



BellaVista



第5世代
リレー
エッセイ

Vol.1



今『舞台』に夢中です!

第5世代の方に、
自分が「今」好きなものを
自由に紹介してもらいます。

神原 明果さん



>>> haruka kambara
世界中が好きなものであふれている私ですが、
その中でも特に好きなものはやはり「舞台」です。
今、というよりもずっと、観るのも立つのも大好きです。

>>>

中学、高校は演劇部に所属し、上京してからは数え切れないほどの舞台を観てきました。

石原さとみさんなど今日のトップを走っている女優さんの舞台から、小さい劇場でやるもの、ミュージカルや朗読劇まで、ジャンルは問わず何でも観ます。

>>>

そして、今年の4月、目標の一つであった舞台出演という夢を叶えることができました。

12歳から10年間あきらめずにやってきたことがやっと実を結んだ瞬間でした。

好きこそ物の上手なれ
好きじゃなければ10年間も一つのことを続けることはできなかったと思います。

>>>

今回の舞台の稽古開始は本番の1か月半前。

1枚目の写真は顔合わせ、本読みの日に撮ったものです。



ここからは毎日朝から夜遅くまでの稽古を重ねて、本番を迎えます。

今回いただいた役は私とは遠くかけ離れた役だったので、役作りのため実際に髪

を染めて日常生活を送ったり、悩み、苦しみ、挑戦の日々でした。



また、舞台初日が誕生日だったため、稽古場で誕生日を祝っていただきました! 温かい座組です。



そして迎えた舞台本番。



今回立たせていただいたのは、中野にある「ザ・ポケット」という劇場です。



今までの人生で経験したことがないほど濃密な時間。女優を目指して上京し、やっと立てた初めての舞台。

心から尊敬できる先輩方の背中を見つめながら自分の不甲斐なさや悔しさに負けぬよう必死に食らいつく日々。

苦しい時間の方が多かった。だけど苦しければ苦しいほど、



ああ、わたし、本当に芝居が好きなんだなあ実感する日々でした。



たくさんの方が観に来てくれて、たくさんの贈り物をもらいました。

私の大好きな舞台。いつか神原家の皆さんにも観てもらえますように。



>>> 次回は、イサラウタクン彬宏さんにリレーします。お楽しみに!



すべての若者に 教育を受ける機会を提供 グローバルに展開する 「神原育英会」の歴史

KAMBARA
IKUEIKAI

郷土の優秀な 若者たちのために

常石グループの基礎を築いた神原勝太郎は、明治の頃、尋常小学校を3年（9歳）の途中で中退しています。その理由は「学業よりも当時の神原家の暮らしの方が大事だった」というものでした。しかし、成績も良かった勝太郎にとって、学校をやめるといふ決断は、とても悔しいことだったといえます。

後に私塾に学び、苦勞の末に海運業を起こした彼は、教育の大切さを、身をもって知っていたのです。そして思いました。郷土の若者たちに、昔の自分のように悲しく悔しい思いをさせたくない。この思いこそが、これから紹介する事業の始まりです。



神原勝太郎肖像画。『神原勝太郎伝』より

戦後間もなく、六三制の義務教育制度が整ったとはいえ、海と山に囲まれて耕作地の少ない沼隈地方の若者たちは、どんなに優れた能力があり、また人一倍の向学心を持っていたとしても、よほどの経済力がなければ、上級の学校（高校、大学）で学ぶなどということは、考えられないことでした。郷土の若者のそんな境遇に接した神

原勝太郎は、彼らが教育を受けられる環境を提供したいと考えたのです。このような個人の体験と、それをもとにした地域への思いが「育英会」という若者の可能性を大きく広げる組織設立の背景になったのです。

船の運航利益を 全額投入

育英会という組織をざっくりと定義すると「主に経済的に恵まれない学生・生徒に学資を補助して勉学を助けるために設けられた団体」ということになります。

神原勝太郎が設立した育英会の名称は「神原育英会」。学資の補助と運営の基礎となる資金は、勝太郎自身が所有していた鉄鋼船「第二天丸」の運航利益をすべて投入することになりました。つまり、全額を勝太郎の私財で賄うということです。昭和29年1月のことでした。しかし育英資金提供の対象者は、沼隈郡それも当時の千年村の若者という、あくまでも地域を限定した小規模な育英会としてのスタートでした。

延べ6百人の 資金利用者

平成29年6月現在、神原育英会の学資資金を利用した対象者は、約6百人を数えるに至っています。社会そのものが豊かになった平成以降は、高校生の利用者はほとんどなく、ほぼ全員が大学生となっています。

理系文系の区別なく高い教育を受け

た彼らの活躍は、神原勝太郎をはじめ設立に力を注いだ人々、またその遺志を引き継いで現在の育英会を運営する理事、評議委員、スタッフにとって大きな喜びとなっています。

また対象者も、当初の千年村の若者から、備後地域、広島・岡山県、やがて全国の若者へと輪を広げていきました。さらに日本人以外にも、弥勒の里国際文化学院日本語学校の生徒（中国やベトナムの若者）も、この資金を利用して日本の教育を受ける機会を得ています。そして今では日本国内にとどまらず、すでに世界的な規模で広がっています。

グローバルに広がる 育英会の輪

当初は「郷土の若者のために」という目的と制度で運営していた神原育英会。やがて日本全土、アジア地域へと対象者を広げ、2007年に新たな活動として南米のパラグアイに神原育英会を設立して、同国の発展に寄与すると同時に同国と日本の架け橋となるべき人材に、教育の機会と環境を提供する活動も展開しています。

当初は日系人子弟への奨学金給付、日系教育機関の運営援助などに役立てることにしていますが、将来は同国のすべての学生・生徒に広げていくことを予定しています。また同国の隣国であり、常石グループとも深い関係のあるウルグアイでも、同様の育英会の設立を検討しています。

名前通りの 大人になりたい

神原 知穂さん



昨年、成人を迎えることができませんでした。過去を振り返ると、楽しいこと、辛いこと、悔しいことは数え切れないほどあるし、未来に私を待っている未知な思いや経験、責任は怖い。けれど、そのどれもが自分のユニークな「人生」という経験を形作っていく要素なのだと考えると、どんな日でも最大限に生きて行きたいと思えます。

私は今まで、みんなに心配をかけてばかりでした。きつと今でもまだそうです。それに対して、私は後悔よりも感謝の気持ちで一杯です。私が自分で見つけ出す道を信じて応援してくれている皆さん、ありがとうございます。おかげでいろいろな迷ってきた私も、自分で自信と責任を持って前へ進もうとする価値を学びました。

もちろん、先のことや自分の判断に不安な時もまだまだありますが、どんな道を選ぶうとも「知穂」という名の通り、新しい知恵を集めながら常に自分を改善し続け、稲穂のようにもろって来た分、人に返せる大人を目指すこと——それが子どもの自分から大人の自分への願いです。



成人おめでとうございます

ハタチの感想

藤原 穂菜さん



今年3月に、無事成人を迎えることができました。まずはこの20年間、私にさまざまな経験をさせてくれて、いつもたくさんさんの愛情を注いでくれた両親に感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございます。京都の家を出て一人暮らしを始めてから2年が経ち、自分がどれだけ多くの人に支えられて生活していたのかを実感しています。

20歳になり、私が今まで思い描いていた姿とはほど遠い、今の自分に日々焦りを感じていますが、これから大学を卒業し社会に出て生活をしていく中で、自分の「意思・考え」は大切にしていきたいと思っています。周りの人からの言葉にただ流されるのではなく、その言葉にしっかりと耳を傾けつつも、その中で特に自分が何を思い、何を考えているのかをしっかりと持つて生活していきたいです。そして、自分で自分に胸を張れるような、自分が正しいと信じた道を進んでいきたいと思っています。

いつか自分で自分を誇り、褒めてあげられるような人間になることを目標に、また周りの方への感謝を忘れずに日々精進してまいりますので、今後ともよろしくお願い致します。



母より

穂菜へ

成人おめでとう。
穂菜が大学に行って初めてゆつくり帰省できたのが、今年の成人式でしたね。久しぶりに穂菜とゆつくり過ごすことができて、とても嬉しかったです。

ママにとって、穂菜が自分の思うままに人生を歩んでいくことが喜びです。でも、思うようにいかず、悩み苦しくなる時もあると思います。そんな時は、いつでも連絡してきてね。穂菜に会いに行くよ。これからも、素敵な笑顔の穂菜でいてください。

ママより



ファミリー予定

開催日: 10月6日(土) 11時～(予定)

行事: 大般若祈祷法要(無明院本堂)

Hiroshima Fukuyama
Shinshoji
Mumyojin